法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-04

【図書紹介】『カント伝』マンフレッド・キューン著　菅沢龍文・中澤武・山根雄一郎訳　春風社　二〇一七年

KONDO, Shu / 近堂, 秀

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学
(巻 / Volume)
15
(開始ページ / Start Page)
71
(終了ページ / End Page)
71
(発行年 / Year)
2019-03-30

【図書紹介】

『カント伝』

マンフレッド・キューン著　菅沢龍文・中澤武・山根雄一郎訳
春風社　二〇一七年

近堂　秀

本書は、スコットランド啓蒙やドイツ啓蒙、カントの哲学思想の研究で知られるマンフレッド・キューンによるカントの伝記 *Kant. A Biography* の全訳で、千頁を越える大著である。原著はドイツ語版をはじめとしてすでにヨーロッパ、アジアの各国語訳があり、日本語訳を期待していた読者にとって本書の刊行は画期的であろう。

本書の内容は、「序」、「1．子供時代と青年期の初期（一七二四―四〇年）」、「2．学生と家庭教師（一七四〇―五五年）」、「3．洗練された修士殿（一七五五―六四年）」、「4．新生とその結果（一七六四―六九年）、「5．沈黙の歳月（一七七〇―八〇年）」、「6．「すべてを粉砕する」形而上学批判者（一七八〇―八四年）」、「7．人倫の形而上学の定礎者（一七八四―八七年）」、「8．宗教と政治に関する異議申し立て（一七八八―九五年）」、「9．老カント（一七九六―一八〇四年）」からなる。まず「序」で、キューンは、カントの死直後にケーニヒスベルクで出版されたカントの人物像に関する著作を取り上げ、ボロフスキ、ヤッハマン、ヴァシャンスキによるカントの伝記でカントが「平面的な性格」に仕立てられたことを指摘する。これに対してキューンは、最新の資料に基づく新しいカントの伝記として、読者が「グローバルな文脈」、「地方の文脈」、「地元の文脈」という三つの文脈でカントの生涯と思想を理解することができるように論じていく。以下、キューンは、カントの知的成長の過程を追跡し、「沈黙の一〇年」を経て批判哲学の成立へと至るカントの思想展開を当時のカントの日常生活と執筆活動、他の哲学者との関係と照らし合わせながら手際よくまとめている。特にカントの最晩年における精神の衰弱を描いているところは、その時期の遺稿である『オプス・ポストトムム』をどのように評価すべきかを考える手がかりになる。

カントの人生と知的生活、同時代人との交流、同業者の反応を丹念にたどった本書によって読者は、従来のステレオタイプのイメージとは異なるカントの人物像をその生涯と思想とともに知ることができるであろう。こなれた訳文で読みやすい点も、強調しておきたい。

原著　Kuehn, Manfred, *Kant. A Biography*, Cambridge University Press, 2001.